日本医学図書館協会加盟館員としての 責務と要望(1)

The Japan Medical Library Association and Its Activities;
Views and Suggestions from the Member Libraries (I)

和歌山県立医科大学附属図書館

曾我部 昭 美*

要約：協会のあり方について過去に述べられた提言のいくつかをとりあげて、委員会活動、総会の開催方法、協会の性格・組織などを論じ、委員会活動の活発化を提案している。(T.I.)

協会加盟館としての役割、責務、または協会に対する要望等、一口に言って、協会のあり方、というものについて、日頃、いったい、どのように考えているだろうか。日々の業務に追われて、とてもそこまで考えが及ばないというのが正直なところではなかろうか。そこで、この際、自分なりにいろいろ頭を巡らせてみるのも、加盟館員の責務であろうと考え、あえてペンをとった次第である。以下、雑感風に述べてみたい。

*

協会のあり方については、過去に本誌で特集されたこともあり(14巻2号, 1967)その後も折々にいろいろの提言が本誌でなされてきている。さらに少し古い話になるが、第33回総会(奈良医大, 1962)の承合事項(大阪区)の中の「日本医学図書館協会はどんな方向に進んだらよいと考えますか」にも多くの提言がみられる。だが、これら協会の性格、組織、財政、活動等に関する提言の多くが、その後、協会内で十分に論議され、検討されることなしに、今日まで至っているのではなかろうか。

今日、協会が当面している大きな問題の一つは、勿論医学情報サービスの技術的側面であろう。最近の本誌の特集がおのずからそのことを示しているように。しかしながら、ここで再び、協会のあり方を特集するというこ

とは、とりもなおさず、これら協会の基本的な問題をもなおざりにすることはできないということと同じく示しているように思う。いや、むしろ、加盟館が増え、情報活動が複雑になればなるほど、これら基本的な問題を検討し、解決しておく必要にせまられていると見るべきであろう。

これらの問題については、過去の理事会等では話題にのぼり、一応の結論は出ているのかも知れないが(理事諸氏の活躍については、平素より頭の下がる思いで一杯であるが)しかし、この際、より多くの加盟館が参加した形、即ち、先の特集での提言の一つである津田¹⁾のいう委員会活動という形で、これらの問題について十分再検討してみる必要があるのではなかろうか。又、これらの問題だけではなく、協会の当面している問題は、ここ十年間におけるいちじるしい加盟館の増加、或いは協会の内外における情報活動の変化、乃至は変質等をみると、その他にいろいろ抱えているはずであり、それらの問題について、加盟館の総力を結集した形で、一つの方向を見出すべく論議するべきであろうと思う。

現在でも勿論、委員会は幾つかあり、活発に動いているわけだが、かつては20近くの委員会が、協会の花形として活動していたと聞いている。確かに津田¹⁾のいうように「過去においては、余りに無計画に委員会ばかり作りすぎたきらいもあり、委員会の仕事の処理能力には屢々疑しい点も見られた」かも知れないが、反面「協会の

* Akimi SOGABE: Wakayama Medical College Library
(昭和54年2月7日受理)

仕事を加盟館全体が自分の仕事として分担」とするという意味において、十分計画的に設置された委員会に、より多くの加盟館が参加することは、加盟館の責務の一つではなかろうか。

*

第49回総会(岩手医大, 1978)で強く印象に残っていることの一つは、会則検討委員会より提出された、司書会議の廃止に関する協議題が保留になったことだが、このような重要な問題は、会則にかかわるからといっても、もっと具体的に、司書会議に関する委員会、というような形に発展させて、構成館もふやし、事前に、各加盟館からアンケートをとるとか、又、過去の総会を詳しく分析するとかして、十分に納得のいく結果を提出することが望ましいのではなかろうか、と私自身の反省も含めて、後から思ったことである。

それからついでに、総会についてさらに思うことは、開催方法についても、再検討の時期に来ているのではなかろうか。即ち、今日のように加盟館が増加してきた段階で、古くからの慣例となっている一館当番制というものに疑問を感じるのである。といって別に名案があるわけではないが、例えば、開催地を全国数カ所の主要都市に決めておいて、実質性のある地区担当にするとか、勿論、それはそれでいろいろ問題はあるわけだが、とにかく、今後8年ほどすでに当番館が内定しているといっても、今から委員会を設けて検討をはじめてもいいのではなかろうか。

*

先に触れた第33回総会の承合事項「日本医学図書館協会はどんな方向に進んだらよいと考えますか」は、現在読みなおしても仲々興味深い内容のもので、その後のいろいろの提言の土台の一つになっているように思うが、その項目の一つ、協会の性格については、このまま任意団体でよいとする意見と、公益法人にしたほうがよいとする意見とに大きく別れているが、その後、この問題について、本誌上で取り上げられたことはあったが²⁾、協会として正式に検討した風には聞いていない。思うに、こういう協会の根幹にふれるような問題については、できれば専門家を加えた委員会を設けて検討し、その結果を加盟館に示す必要があるのではなかろうか。私の印象では、今日までなんとなくもやもやしたまま来ているように感ずる。

*

協会の組織についても、実に種々の意見が出されてい

るが、そして、その後、会則検討委員会で検討され、改正された事項もあるが、まだ大きな問題が残されているように思う。現在の大学中心の協会では、確かに津田³⁾や後藤⁴⁾等が指摘しているように、名称を改める必要があるだろう。医学図書館協会と呼ぶかぎりには、病院図書室やその他医療分野の図書館等も包含されてしかるべきであると思われるのである。

近畿には、現在、「近畿病院図書室協議会」というのが存在し、わが協会の近畿地区とも密接な関係にあるが、協議会としては、病院図書室部会、というような形で、協会に参加できればという考えを持っているように聞いている。病院図書室の組織が、今後さらに全国的に拡がっていく様子であることを思うとき、小図書館の育成に手を貸すべき協会として、このまま傍観的な態度が許されるであろうかと疑問を覚えざるを得ないのである。結果は別として、協会として一度検討すべき問題ではなかろうか。

なお、昭和54年度より、初級研修会に、定員に余裕のある場合、薬学図書館協議会からも参加を認めるという風に聞いているが、従来から、病院図書室側からも強い参加希望の声が出ているのであり、こういう問題は会則とか定員とかにあまりこだわらずに、人数をしばってでも早速に希望を受け入れるというわけにはいかないものであろうか。

個人会員制の問題についても、恐らく、以前から話題に上っているのだろうが、又、本誌にも取り上げられているが²⁾、それ以上のものではなかったにちがいない。個人会員制の是非については、いろいろ議論のあるところと思われるが、現状では、極く素朴に考えても、加盟館員一人一人と協会とはどうしても遊離しがちであるのはいじめないし、ひいてはそれが協会内部からの真の活力の盛り上がりをもたげている面があるのではなかろうか。又、病院図書室やその他にも個人会員制が及ぶことによって、相互にいろいろのメリットが考えられるように思う。

*

協会のあり方について展望する場合、その前方につねに、協会の貧しい財政と「互恵互助」という二つの山が大きく立ちはだかっているように思う。もし、協会の財政が豊かであり、そして「互恵互助」のタガを全面的に取りはずすことが、可能であるならば(後者については、天野⁵⁾も指摘しているように、すでにそのタガははずれかけているともいえるが) 幾つかの問題は解決するであ

ろう。現実には、我々の会費負担は、同種協会にくらべて決して軽いという意見があり、又「互恵互助」の精神にしばられるがゆえに、協会は閉鎖的であるという批判の声を耳にする一方で、「互恵互助」に固執している気分が協会内には根強いのではなかろうか。これらの問題は、目下、行きづまり状態にあり、殆んどタブー視されているといってもいいであろう。だが、これらをさけて協会のあり方を論じて、それは空論にすぎないという面が確かにある以上、やはり十分に論議をつくす必要があるのではなかろうか。

*

過去における協会のあり方についての提言の多くが、協会としての結論を得ないままに今日に至っていることについては、それなりの隘路があつたことと思う。又一加盟館としても、責任の一端を感じるところである。しかしながら、検討されてしかるべきと思われる提言を提言のままに終らせては意味がないと思う。委員会活動を提案した次第は、それが、もしかすれば、提言を生かす一つの道かも知れないと考えたからである。

協会は、いま、次の50年へ向かってスタートを切ったところである。本誌が、ここで再び、協会のあり方を取り上げたことは、時機にかなったことであり、さまざま

な提言が提出されることと思う。それらを加盟館で議論百出し、そして一つの方向を見出すべく努力することが必要ではなかろうか。

引用文献

- 1) 津田良成：日本医学図書館協会の将来，医学図書館 14 (2)：93—98, 1967.
- 2) 沙藤隆茂：協会のあり方—批判と要望(2) 法人組織化で体質改善を，医学図書館 14(2)：135—137, 1967.
- 3) 津田良成：日本医学図書館協会 過去，現在，未来について，医学図書館 23(1)：18—28, 1976.
- 4) 後藤久夫：外部からみた日本医学図書館協会(2) 病院図書室，医学図書館 23(1)：44—53, 1976.
- 5) 天野善雄：日本医学図書館協会と相互協力，医学図書館 20(4)：285—292, 1973.

参考文献

- 雨宮祐政：日本医学図書館協会財政論，医学図書館 14 (2)：113—122, 1967.
- 橋本輝昭：協会のあり方—批判と要望(1) 財政基盤の確立が急務，医学図書館 14(2)：133—135, 1967.